**書道教育を通しての人間形成に関する総合的研究**

**Ⅰ　問題の所在**

近年、日常生活のあらゆる場面からコミュニケーション不足や人間関係の希薄化が問題とされる。それは現状のみならず次世代の子ども達にも影響を及ぼす。故に人間形成、道徳教育の充実が必要とされる。

筆者は書道塾を通して子ども達と日々接している。そこで感じたことは生き生きと作品に向かう子ども達の姿勢、自己表現力のすばらしさである。これは、これから人として学び、成長していく中で、豊かな人間形成と強く結びつくものであると思われる。

今回の学習指導要領改訂では、国語科において、「伝統的な文化と国語の特質に関する事項」が新たに加えられた。「書写に関する事項」の中で、従前から、硬筆を使用する書写の指導は各学年で行うものとしていたが、今回は、「毛筆を使用する書写の指導は硬筆による書写の能力の基礎を養うよう指導する。」とある。これは、「毛筆」を使用して書写の指導を行うことの国語科におけるねらいを明確にしたものである。

小、中学校の国語科においての「書写」は、字を正しく整えて速く書くのが目標とされる。日本の伝統文化である「毛筆」が何故、今必要とされるのか。機械化が進展し情報機器が氾濫している今日の社会だからこそ問われる。

学校におけるＩＣＴ機器活用の拡がりと共に、手で文字を書くことが相対的に少なくなってきたように思う。「書写」において育成されるべき能力をどう考えるかという点で、言語の能力としての、

すなわち、正しい字で読みやすく、書きやすく、速く書く能力の育成は、鉛筆から、毛筆に変えた時点で大きく変化するように思われる。

平成21年に公表された「新常用漢字表」も「情報化社会の進展と漢字政策の在り方」として

発表者：　渡邉祐子

指導教員：押谷由夫先生

効率性が優先される実用の世界は別として、＜手で書くということは日本の文化として極めて大切なものである＞また＜手で書いた文字には書き手の個性が現れるが、個性を大事にしようとする時代であるからこそ、手で書くことが一層大切にされなければならない＞＜情報機器が普及すればするほど手書きの価値を改めて認識していくことが大切である＞と述べられている。

本研究は、「伝統文化」として、現状の学校教育において、書道教育が豊かな人間形成にどのような役割を果たせるのか、また書道を通して手で文字を書くことの価値や意義を見つめ直し、書道の歴史、書道文化を踏まえて考察する。

**Ⅱ　研究の目的**

本論文では、次の６点に目標を置き、研究を進めることを目的とする。

１、書道教育が人間形成に大きく影響を与え道徳教育において欠くことのできない総合性を持っていることを明らかにし、美的情操教育の可能性を探る。

２、書道の文献や研究資料を収集して我が国における書道文化の特徴と変遷について理論的に考察する。日本人としての誇り、支えの文化としての書道の魅力、可能性、心豊かな人間として自信を持って生きられる、つまり価値意識に通ずることを明らかにする。

３、書道の作品を通して「自分らしさを表し、よりよく生きる力、自己表現力の身につけ方」を具体的に考察する。写経、書き初め、古典の臨書などが書道の歴史においてどのように人間形成にかかわり、それが日本独自の道徳文化、書道文化を生み出し、よりよい自己形成、精神の統一に繋がってきたか、書道文化の大切さを明らかにする。

４、現在、書道に興味を持ち、熱心に取り組んでいる子ども達にインタビュー、アンケート調査等を行い、今日の子ども達における書道の意義と日々の生活文化や生き方の中に書道をどのように位置付け、定着させていくかを考察する。

５、小・中・高・大学において書道がどのように指導されているかを調査し、書道を通しての「心の教育」・「美育」・「道徳」という視点から、カリキュラム開発や家庭、地域と連携した取り組みなどの提案もしたい（書き初め、写経、絵手紙などの展覧会等）。また、それら書初め等具体的に行った事に対して、日常生活、生活態度にどのような心の変化が現れたかを考察する。

６、わが国の文化を大切にしながら、国際社会で活躍する子ども達を育てるためには、書道教育が大きく貢献している事を明らかにする。

**Ⅲ研究の方法**

１、先行研究（文献研究）

２、授業の参与観察（小、中、高等学・大学において参与観察及びインタビューをする）

３、筆者の書道塾に通う生徒の心の成長の記録

**Ⅳ　章の構成**

**第１章　人間形成と書道に関する理論的考察**

　第１節　我が国の教育の伝統

　第２節　書道教育と道徳教育

　第３節　教育に関する書道の役割

**第２章　書道文化の歴史的分析**

第１節　漢字の渡来に始まる日本書道史における時代的背景

第２節　和様文化にみられる日本人の心と造形美の考察

第３節　江戸時代における文字文化・貝原　益軒『和俗童子訓』からの考察

**第３章　書道との出会いにおける道徳的発達及び自己表現力についての考察**

　第１節　幼児期から青年期における書道教育の果たす役割とコミュニケーションの変化

　第２節　発達段階における事例研究の考察

**第４章　学習指導要領の変遷とその書道教育の**

**歴史的背景**

第１節　小・中・高等学校「書写・書道」の学習指導要領の変遷

第２節書道教育の歴史的背景

第３節　指導法の新たな課題と提案

**第５章　教員養成課程における書写・書道指導**

　　第１節　書写・書道指導テキスト分析

　　第２節　書写・書道指導の実際と課題

**第６章　人間形成に果たす書道の在り方**

第１節　生涯学習における書道

第２節　グローバル社会におけるコミュニティ

づくりと書道

**終章**

第１節　研究の成果

第２節　今後の課題と展望

**Ⅴ　研究の内容**

**第２章　書道文化の歴史的分析**

**第１節　漢字の渡来に始まる日本書道史における時代的背景より**

＜漢字の渡来について＞

『書の歴史』（伏見沖教，１９６０）「日本の書道は、文字（漢字）を持っていた中国、朝鮮によって開眼されたことは言うまでもない。中国の漢字がどのように発生したか、その精確な年代は知ることはできないが、確実な遺物によって、今から三千数百年前には、すでに現在と同じシステムの漢字が完成していたことがわかる。しかし、それまでには長い経過を必要としたのか、或いは突如として形成されたのかは、どちらともいえないとされる」述べている

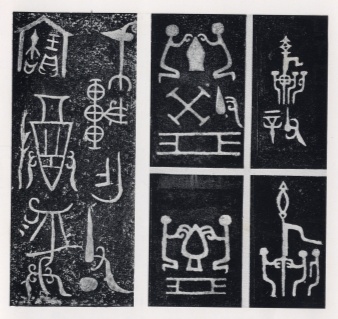
伏見は、「漢字は多く、象形文字である。そして、後世の学者は、先ず物の形に似せて書いたものが文字の最初の母胎となったように考えがちのようだ。果たしてそうだろうか。むしろ数詞のようなものが初めに書き記されたのではないか。例えば羊百三十六頭、牛五十頭と記憶または、伝達しようとするとき、物の種類ではなく数である。数字を正確に書くことが必要で、そのうえで物の特徴のどこかを書き添えたのであったろう。一度こうした記号化に気が付けば、急転直下、たちまち言語伝達のシステムにまで到達したのであろう」と述べている。このことから言えることは、文字の発達は、人と人との繋がり、まさに、現代におけるコミュニケーションの必要性に欠くことのできない手段とされてきたと言える。

最初の文字がどんな道具で書かれたかは未だにに解らないとされているが、発掘された土器の絵付けなどにあるように、早くから毛筆が使われていたようである。

伏見は、「漢民族は常に『美』を愛したとされる。今生まれたばかりの文字にも、直ちに美しくすべき努力が加えられた。亀の甲や獣の骨に刻みつけられた文字、銅器の銘文に彫られた文字はいずれも美しい」と述べている。

今我々が見ることの出来る最古の資料は紀元前１３８４年の殷帝国の時代のものである。

さらに伏見は「文字は生まれるとすぐ、あまりにも偉大な力を発揮した。このような、空間と時間とを超越する存在は、前代まで人の考えてもみなかったことである。そこに神性を意識される素因がある。文字は実用もだが、その当時の遺物は、戦いや狩猟や稲作やさまざまな事柄を神に問うた記録である。後世まで消えぬよう刀でしっかりと刻まれている。シンメトリーを尊ぶ美しい漢字の始まりである」と述べている。右の図を見るとシンメトリーの美がはっきりと解る。



おおよそ四千年の時を経て、漢字が日本に伝わり、定着し、そして今思うことは、神代の古代人が伝えようとした事、まさに自分の気持ちや、その思いを後世に残したいと思った人の心である。

昨年三月に起こった東日本大震災からもうすぐ一年が過ぎようとしている。「**絆**」と言う漢字の下に多くの人が集まり、その復興を願っている。

また、読売新聞の記事／（2012，1，8）に、岩手県大船渡の二人の少年が、今年の書初めをした内容が掲載されていた。一人目の少年は、「去年は家が津波で流されたから、今年は家族みんなで**和**みたい」との事で、**『和』**と書いた」、もう一人の少年は、「世界中の支援を受けて団結しているこの**時**を大切にしたいとの思いを込めて**『時』**と書いた」とあった。復興の願いを書（文字）に込め、それを媒体として、人と人の心と心を繋ぐ大切なものを表現しようとしたことは、古代より変わらないと言えよう。

**第３節　江戸時代における文字文化　・貝原**

**益軒『和俗童子訓』からの考察**

＜貝原益軒『和俗童子訓』について＞

貝原益軒（1710）は「君子は子が生まれて、ものを食べられるようになり、ものが言えるようになると、教育をはじめた。聖人が小学の法をたてられ、わけのわからない子どもに正しいことを教えられるのは、まことに理にかなったことである。赤ん坊は人生のはじまりである。この時は誰もみな性質が似ている。君子ははじめを慎む。はじめにごくわずか違ってもあとでは千里も違ってしまう。理性や思考もまだ起こっていないが、その善をなし悪をなすわかれ道はここにある。ごくわずかの正邪をわきまえて、善をもって導けばよくなる。これがはじめを慎む理由である。もし早い時期に教えないで、年が大きくなってしまうと、内は嗜好のために溺れさせられ、外は世間の流行によって誘惑される。欲をほしいままにして、天地の理がほろびてしまう。ぼんやりとしてどこへ行ってよいかわからなくなってしまう。小人にならないようにしようと思ってもできない。これは千里を誤ったということになるではないか。だから人に教えるのには、早くから教えることを急がねばならない。後世の民間では子どもたちの間違った成長を正さないでいる。そのために日ごろ見聞きしたり、習ったりすることがみな徳性をきずつけ、礼法をないがしろにするばかりである。だから、私はここにおこがましい話だが、古人が師弟に教えたことの意味をとって仮名で書いてみた。へんぴな村で師もなく学者もいないところの子どもたちが読んで役に立つようにと思ったのである。かえりみると、私はもう年をとってしまって、文章の筋道もよく通らないし、子どもたちにうまく教えられないかもしれない。志のある君子が改作をしてくださったならば幸いである。」と述べている。これは、道徳教育の「価値意識の形成」と通じるように思う。私達はどのようにして価値意識を身に付けたのであろうか。生まれた時から教育が始まり善悪の意識の判断が出来るようになること、それは、父母の影響、又それに準ずる環境などが重要になってくる。「赤ん坊は人生の始まりである・・・・」と述べている。これは今、まさに早期教育が問われることを示すものであろう。

＜巻四「手習い法」について＞

―筆跡は心をあらわす―

貝原は「古人は『書は心画なり』と言った。心画とは心の中にあることを外に書き出す絵である。だから筆跡の正しいか正しくないかをみて、心の正しいか正しくないかがわかる。筆跡で心の中もわかるのであるから、慎んで正しく書かないといけない『心正しければ筆正し』である。およそ、字を習うには、楷書、草書ともに手本を選んで書体を正しくさだめないといけない。初めから必ず書体が素直で筆法の正しい、昔の能書の手蹟を選んで手本とするが良い」と述べている。

現在も事あるごとに言われるが、なかなか大人になってからでは筆跡は直せない。やはり、小さい時から良い手本に出会い、手習いが大切になってくる。筆者は、漢字を習うには基本的に、中国の筆跡を学ぶのがいいと思う。まず一番に手本としたいのは唐、欧陽詢の『九成宮醴泉銘』が良い。何故なら『九成宮醴泉銘』は“楷法の極則”とされる名品だからである。九成宮とは唐代帝室の離宮のことで、この地はもともと高所にあり、水源に乏しいという欠点がある。水が湧き出し、この醴泉の出現に“唐朝の徳”とし、記念碑を建立し、この文字を唐三家の一人、欧陽詢が記したものとされる。洗練されて背筋がピンとなる起筆である。すがすがしいという形容詞が似合う。まずはこの手本で習うと正しい楷書の筆跡が身につくであろう。

―はじめての手習いには―

　「子供が初めて手習いをするには、まず一二三四五六七八九十百千万億、次に天地、父母、五倫、五常、七情、四民、陰陽、五行、四時、四方、五穀、五味、五色などの物の名前を書いた手本を楷書に書いて、大きく習わせるが良い。」と述べている。ここで「大きく習う」ということは文字を紙に大きく書くと言うことである。これはとても大事なことである。何故なら、大きく書くことは、自分に自信が無いと書けない。まさに「書は心画なり」である。

　ここで、筆者の書道塾の幼稚園生のＮちゃんを紹介する。４歳のときに入室のＮちゃんは字を書くこと（お手紙）が大好き。でも自信なし気にノートの端に小さい字で書いていた。「大きくかいて」と言ってもなかなか大きく書けません。そこで、大きなまるをたくさん書いてもらうと、緊張もほぐれ、ノートの中心に大きな字で書くことが出来た。このまるだが、起筆から終筆まで心を統一しないとうまく書けない。心を落ち着かせ、気持ちの集中が大事である。はじめての手習いは、これからの人間形成への大事な一歩となり得るであろう。

**Ⅵ　今後の課題**

　日本における伝統文化としての書道の位置付け、和様文化に見られる日本人の心とその造形美について先行研究及び文献研究（小、中、高、大学の学習指導要領の分析など）により考察を進める。

　また、公立小学校を主とした書写の授業参観を通して考察する。

**Ⅶ　主な引用・参考文献**

1)貝原益軒／松田道雄訳『日本の名著１４』

（中央公論社　，１９６９）

2)伏見沖教　『書の歴史』（二玄社　，１９６０）

3)今井凌雪　『書を志す人へ』（二玄社，１９７９）　4)上田桑鳩『書道鑑賞入門』（創元社，１９６３）

5）名児耶明『書の見方』

（角川学芸出版，２００８）

６）読売新聞／(2012，１，8)

**＊中間発表追加資料**

**Ⅴ　研究の内容**

**第３章　書道との出会いにおける道徳的発達及び自己表現力についての考察**

　第１節　幼児期から青年期における書道教育の果たす役割とコミュニケーションの変化

1. **S女子大学日本文学科４年生の授業より**

　筆者は平成23年度12月１日より6回程、日文4年生と一緒に書道実習を受けた。国語科・書道科教育の授業である。カリキュラムの内容は、大学４年間の集大成としてとても濃い内容であった。

・古筆臨書「寸松庵色紙」

・巻紙・礼状

・漢字仮名交じり書

　＜巻紙・礼状についての考察＞

学生Ｓさんが小さい頃よりお世話になった伯母様に宛てた礼状を紹介する。

「拝啓

　朝晩の寒さが身に染みる季節となりましたが、伯母様におかれましては、益々ご健勝のことと存じます。

遠回りして入学した大学での生活も残すところ二ヶ月あまりとなりました。大学では専門の日本文学以外にも副専攻として日本語教育学を学び国語科教育や書道家教育、司書教諭の勉強にも力を入れました。

それから一般教養では家庭の医学等の、自然科学の領域にも挑戦しました。

卒業論文は梶井基次郎論で『城のある町にて』『ある心の風景』『冬の日』の考察を通して、作者の死生観に迫りました。

幅広く学んだことで、学問はつながっているという気付きを得ることができました。

伯母様には幼いころより温かく見守っていただき、また就職に関してもご助言いただきまして大変感謝しております。

　まだまだ寒い日が続きますが、ご自愛ください

ませ。　　　　　　　　　　　　　　　　　　　敬具」

生活機構研究科　人間教育学専攻

　　　　　　　　　　　　　　　　　　M１　渡邉　祐子

この礼状から考察できることは、日本の伝統文化における毛筆で、小さい頃からお世話になった伯母様に対し、敬意を表して自分の思いを綴ったＳさんであるが、自分自身が、これから迎えようとしている「社会人としての自覚」に対する決意を綴ったものであると考えられる。

　Ｓさんのインタビューを通して、専門の日本文学以外にも副専攻として、日本語教育学、書道家教育等を学んだ理由を聞くと、「これからの国際社会でよりよく生きる為に、日本の伝統文化の書道に触れ、それを身に付けることが自分自身の自信に、きっとつながると思った」とのことであった。日本の伝統文化の書道に価値意識を見い出し、手紙をきっかけに、自己と向き合い、自己を振り返り、また自己を見つめ直すことが出来たと考えられる。書道を通しての人間形成につながると言えよう。

1. **Ｓ女子大日文４年生（書道実習を受ける8名の学生）に＜書道に対する思い＞＜大学での書道の思い出＞の２点についてアンケート調査結果からの考察**

＜書道に対する思い＞の質問では、８名中5名が、幼稚園、小学校１年生位から習い始めたということであった。

下記に1例紹介する。

＜書道に対する思い＞

「書道は、『私が私であること』を確立してくれたものでした。

小学校１年の時に、唯一自らやりたいと始めた習い事が書道でした。

きっかけは友達数人が通っていたからというものでしたが、書道の楽しさに魅力され、いつの間にか友達が皆辞めても私だけはずっと、大学受験前まで続けていました。

私は書道をやっていたおかげで、小、中、高とどこへ行っても『字が上手い人』と認識されました。地味で、特別勉強ができるわけでもなかったですが、字を書くことに関して皆が認めて覚えてくれたのです。

私は周囲の人に恵まれていたのだと思います。誉めてもらえたり、書道を生かす役割やチャンスを与えてもらえたり、自分が胸を張って特技だといえるように、周囲の人々が押し上げてくれたのかもしれません。

それが嬉しくて、そして目で上達していくのが実感できて、もっと頑張ろうと思えたのです。

集中力も養え、努力し継続してゆくことの大切さと自信も得られました。

『自分がどんな人間か』と話すときに、書道のことは絶対に外せません。

書道は私にとって、今までもこれからも、自身の努力と周囲の支えや縁をもたらしてくれる。一生の財産だと思っています。

＜大学での書道の思い出＞

書道実習、特に４年次はメンバーが固定されて少人数だったので、すごく和気あいあいとしていて楽しく取り組むことができました。

皆で先生の個展などを見に行くのも非常に勉強になりました。

　また、実技だけでなく知識としての勉強も

奥が深いと感じました。

文化祭での書道展とパフォーマンスはとても良い経験でした。普段筆を持つことのない人々が、戸惑いながらもだんだん楽しんで、最後は満足そうに、嬉しそうに自分が書いた作品を眺めている様子を見て、私も幸せな気持ちになりました。

そして、私を１年次からずっと見てくださった先生との出会い、存在も大きいです。やはり書道が素敵な縁をもたらしてくれたと思います。４年間みっちり書道ができて、本当に良かったと思います。Ｙ、Ｆ」

　このアンケート調査から考察できることは、

最初は友達と一緒だったり、親の進めだったり、自分の意志とは関係なく書道と出会ったとの答えであった。しかし、続けて行くうちに、書道の楽しさに魅了され、いつの間にか自分の一部になり、「私が私であること」を確立してくれたものになっていった、と記している。

そこには、幼児期から青年期までに、書道とのかかわりによって創られた自分自身の「アイデンティティの確立」への「気づき」があると考える。「地味で、特別勉強が出来るわけもなかったですが、字を書くことに関して皆が認めてくれて覚えてくれたのです」とある。「誉めてもらえたり、書道を生かす役割やチャンスを与えてもらったり・・・」と認めてくれた周囲の人に感謝する優しい気持ちも感じられる。「集中力も養え、努力し継続して行く事の大切さと自信も得られました」とある。

筆者も常に思うことであるが、「継続は力なり」である。

また、書道を通しての出会いによる仲間との信頼関係や、尊敬できる先生（師）との触れ合いにより自分を高めることが出来たという、明確な価値意識を感じることが出来る。

書道との出会いはこれから社会人として世の中に羽ばたく彼女たちの生き方に、大きく影響を与えるものであると考える。